

美しい日本語

翻訳家 金原 瑞人

小学校の授業に英語が取り入れられた。日本人は、本当に英語が好きなんだと思う。初代文部大臣の森有礼もりありのりが「日本人は、もう日本語をやめて英語にしまおう」といったことがあって、講演などでその話をすると、みんな笑うのだが、いまの異様な英語熱をながめていると、とても笑えない。数年前には、英語を公用語にしようという論議もあつたくらいだ。

そしてもうひとつ不思議なのが、その一方で、日本語を大切にしようという立場から「美しい日本語」や「正しい日本語」が云々うんげんされていることだ。本当にそんなものがあるのだろうか。ついでにいつてしまつと、「美しい日本語」で気になるのは、昔の人たちの文章ばかりが取りあげられ、声に出して読まれ、特別なもののように扱われていることだ。

『他人の顔』からの引用はとてもわかりやすい。「一度そこまで追いつめられたことが、結果的にはかえってよかつたのかもしれないね。」

『鼻』にはほかにもこんな文がある。「内供は実にこの鼻によって傷やぶけられる自尊心の為に苦しんだのである。」

あちこちに翻訳文体、それも直訳文体が顔を出していて、作文の時間にこんな文章を書いたら、ぜったい先生にしかられると思う。ついでにいうと、今の翻訳家がこんな文体で訳したら、それこそひんしゆく物だ。それが、名作として教科書で紹介されたりする。冗談だろ、といたくなくなる。それをまた、当時、漱石が絶賛していたりして……。

とまあ、ちよつと怒つてみたけど、じつはちつとも怒つてはなくて、まあ、そういうもんだらうなと思う。おそらく、当時は、こういう直訳風の文がちよこちよ顔を出すのが新鮮でおもしろかつた、ただ、それだけのことなのだ。

「美しい日本語」とか「正しい日本語」とか、そんなものはない。さっきの芥川の文は、今の感覚で読めば、決して、美しくもなければ、正しくもない。しかし、当時は新鮮に響き、「文学的」に感じられたのだろう。

作家であれ翻訳家であれ、いや、ごく一般

漱石が美しいか、蘆外が美しいか、鏡花が美しいか、なら、芥川はどうか。そういうことを真剣に考えたことがあるのだろうかといいたい。ある意味、漱石、蘆外の文体は、ちよど日本語の書き言葉の移行期にあたつていて、その影響をものに受け、今読むとかなりぎくしゃくした文体だし、読んでいて必ずしも快くはない（と、少なくとも金原は思う）。それにひきかえ鏡花の場合はゴーイングマイウェイだから、とても安定しているもの、すでに古文に近くて、意味がよくわからない（と、少なくとも金原は思う）。露伴のエッセイ風の物語などは、安定しているうえに、読みやすいので、学生にはよく勧めるのだが、だからといって、美しいかどうか、それは疑問だ。

芥川なんかは、よく読むと悪文がずいぶん

の人であれ、文章で問われるべきは「正しい」とか「美しい」とかではなく、（その時代において、その状況において、その読者にとって）「効果的であるかどうか」「本人の伝えたいものが伝わっているかどうか」だと思ふ。言葉というのは、伝えるためにあるものなのだから。

そしてまた、古びないものなどない。新しいものもやがて、ありふれたものになり、古いものになっていく。あらゆるものは時間がたてば古びる。もちろん古びても、なお次の時代に通用するものもある。しかし、そういったものが「本当に価値がある」かどうかもまた定かでない。そもそも、そのまた次の時代に通用するかどうかはわからない。というか、そういう絶対的な価値などおそらくないのだ。その時代、その社会、その人にとつて価値を持つかどうか、それしかない。言葉というのは、あくまでも具体的で、実用的なものなのだと思う。

多い。いや、あまりに多い。

たとえば次のような文章。

「内供ないぐの自尊心は、妻帯と云ふやうな結果的な事実じじつに左右される為には、余りにデリケートに出来てゐたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損きそんを恢復くわふくしようと試みた。」

いうまでもなく、『鼻』の一部だ。そもそも「結果的な事実」というのはどういう意味だろう。小学館の『日本国語大辞典』の第二版の「結果的」の項には、ちよど『鼻』のこの部分ぶぶんが引用されているけど、その説明はこう。「結果としてどうであるかということ。結果からみたまま」。はつきりいって、よくわからぬいし、すつきりしない。「結果として結婚していないという事実など……」とでも読めばいいのだろうか。それに引きかえ、安部公房の



金原 瑞人（かねはら みずひと）

1954年岡山県生まれ。

翻訳家・児童文学研究者・法政大学社会学部教授。

法政大学で文学や英語講読を教えるかたわら、ヤングアダルト小説を中心に、数多くの作品を精力的に翻訳。「豚の死なない日」「13ヶ月と13週と13日と満月の夜」「のっぽのサラ」「火を喰う者たち」など、その数は現在200を超える。「ゼブラ」は、光村図書中学校国語教科書（2年）のための訳し下ろし。担当する小説の創作ゼミからは、古橋秀之、秋山瑞人ら若手作家を輩出している。芥川賞作家の金原ひとみは長女。